

論文審査の結果の要旨

氏名 高芝 麻子

本論は、中国における夏の文学の再発見・再検討を試みたものである。古来日本文学では、夏独特の風物や情感を描いた作品が数多く作られてきたのに対し、中国古典詩文においては、夏と冬を描いた作品は極めて少なく、夏と冬に対しては、生理的感覚があるのみで、心理・心情の次元に属する共通感覚はほとんど成立していないとされてきた。高芝氏はこの定説に疑問を持ち、先秦から唐代までの詩歌を対象に、中国における夏の文学の系譜を丹念にたどる作業を行った。

その成果の第一は、戦国時代の楚の国の歌『楚辞』と漢魏の詩賦に、暑さへの恐怖とも言うべき特異な心性が表明されていることを明らかにした点である。『楚辞』「招魂」は、さまよう魂に故郷への帰還を呼びかける歌で、故郷の邸宅の美観や飲食の素晴らしさなどと対照して、東西南北はいずれも危険に満ちた恐るべき土地であると語られる。そのうち北を除く三方向が、毒蛇や怪物の跋扈する地、乾燥した砂漠など変化をもちつつも、酷暑の地であると描かれるのである。陰陽の調和を重視すべき天子の宮殿の描写においても、避寒の部屋よりも、夏にも暑さを退ける部屋の存在が強調され、天子の催す祝宴では、涼しい風が天からの恩寵として描かれる。寒暑に対する心情にこのような偏りがあることは、これまでに指摘されたことはない。高芝氏の研究成果は、中国古代研究に対する大きな問題提起といえることができる。

成果の第二は、六朝・唐代の詩賦の中にも多彩な夏の歌があり、そこにはいくつかの心情が共有され、時代を越えて受け継がれていることを、豊富な具体例を挙げて明らかにしたことである。梁代に「納涼」と題する詩が現れることは、すでに指摘されているが、高芝氏は漢魏の詩賦に現れていた暑熱への恐怖が徐々に薄れ、詩人たちが山水の中に夏独自の美を見出していく過程を示している。また陶淵明は緑濃い夏の木立や、吹きわたる風の心地よさを描き、夏の生命力を心豊かに楽しむ中に、自らが理想とする古代の生活の再現を感じとっていたと指摘する。陶淵明に関しては多くの研究が蓄積されているが、淵明における夏の意義をこのような形で指摘した成果はかつてない。唐代には、これらの歌を継承発展した作品に加え、杜甫や王維が、暑熱に苦しむ自らの姿をユーモラスに描く詩や、生命の汪溢の中で、かえって孤独を感じる柳宗元の作品など、夏を描く詩歌はさらに多様さを増したとする。

成果の第三は、夏の歌をたどるという方法に加え、ある景物が、歴代の詩歌の中でどのような季節感をもって詠われてきたかを考察したことである。従来の詩歌研究では、蝉は秋に鳴き、ものさびしい情緒を表すものとされてきたが、高芝氏は、宋齊梁代、及び中唐以降の詩歌には、活力に溢れた蝉の声が夏の景物の一つとして描かれていることを明示した。

本論は各時代に起こった変化の意味の考察に不十分な点があるものの、斬新な発想で、大量の作品を丁寧に読み解き、従来の定説に検討を促すに足る多くの新知見を提出した点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。